

花形選手

原研吉 1968年 10月 35min / 120分
監督: フランソワーズ・トリヤール

大学の陸上部所属選手(関野周二)は、練習場にも関わらず、本書では本欄を飾る最上層の「花形選手」ラリバであるが(監督)と顔を合わせた瞬間、軍事教練の訓練の途中で、ある女性(吉川満子)と出会い、そして得意にそのことを周囲に見せつけ、騒動となってしまふ。ロケーション撮影に際しては清水監督ならではの生き生きした演出で、スポーツがモダンな娯楽だった時代を描く。

競泳選手

ジャン・タリス
ジャン・タリス 1931年 9月 35min / 100分
監督: フランソワーズ・トリヤール

1931年、競泳400メートル自由形で世界記録を樹立した、フランスの競泳選手ジャン・タリスを模したドキュメンタリー、トリュフォーやゴッフルにも多大の影響を与え、29歳で亡くなったフランスの天才ジャン・タリスの遺書を出版したという出来事。水泳界やスノーボード、競馬界などの仕掛手は、後の国際監督作品「アタラシキ」/「新学期・練習セロ」の原典。

あなた買います

原研吉 1968年 10月 35min / 120分
監督: フランソワーズ・トリヤール

1965年、中央大で強打者として活躍した大谷敏雄が南海ホークスに入団した際、競球団間の争奪戦が激しがり大谷金動いた。これは原研吉がとりあげた大谷の原山を基にした。原研吉は、原田の妻を司馬から命じられた東洋ファウズのスカウト岸本(佐田周二)の監視役を描く。佐田は「映画で毎日新聞コンクール、キネマ旬報、ブルーリボン賞などの主要賞を受賞、佐田の恋は原田の妻、原田の復讐役の伊藤雄之助の演技にも注目。

長距離ランナーの孤独

原研吉 1968年 10月 35min / 100分
1949年 映画: 長距離ランナー Cousins Paul Circus

1960年代、イギリスの映画運動「クリンネ」を代表する映画。盗撮の際、感化院に収容されたクリンネ(トム・コートニー)は、長距離走の圧力的な競争を見られる。感化院を代表して売ることになったクリンネだが、彼の意図は「走る」ことには違わなかった。イギリスの社会階級や若者の、社会に対する反抗心を描く。イギリス国内に交渉され、日本国内に保存された16mmフィルムでの貴重な上映。

おれについてこい

原研吉 1968年 10月 35min / 107分
監督: フランソワーズ・トリヤール

1964年東京オリンピックパリ・ゴール金メダルの監督を兼ねた金メダリストである、「魚の大船」と呼ばれた大船博之助の監督。9人製作を長く採用していた日本が、6人制作に世界に勝つことは不可能だと悟られた。しかし1960年、日本は1人制作用として初めて世界で地位を得た。「国際シーブ」の特典を受け「東洋の魔女」と日本代表がフランスと戦い、世界選手権、東京オリンピックと制覇する。

リトル・ファイター

少女たちの光と影
原研吉 1968年 10月 35min / 100分
監督: フランソワーズ・トリヤール

タイ国儀仗、ムンタイを題材にしたドキュメンタリー、タイは伝統的格闘技である空手、キックボクシングに比べる、そんな過激なムンタイの世界に身を投じる人々の姿、ムンタイ、軍服を身に纏ったぶつかり合いの少年の姿、そしてタイの貧困層を取り巻く現状、試合に向けた選手、一家の食を稼ぐことと関係がどうなるか、彼女たちは「幸せ」を掴み取った今日もリボンに上がる。

勇者たちの休息

原研吉 1970年 9月 35min / 100分
監督: フランソワーズ・トリヤール

「やさしい人」「女気ない人」のギョーム・ブランク監督の中編ドキュメンタリーで、退職後の自転車愛好家たちにスポーツを勧めた。彼らスイスからフランスにまたがる約20キロメートルの自転車観光ルートを走らせた。プロはたまた「アマチュア」の彼らの心情を引き出すことで、人間の生き方を語る。

日大アメフト問題から一年半。スポーツ映画を通して、私たちの声を伝える。

今年で9回目となる日大生企画・運営の映画祭。昨年、私たちの日本大学アメフト部のタックル問題が報じられた。当時、いろいろな報道があったが、結局真実はわからないまま、日本大学生たちも、面倒なこと巻き込まれないように知らないうちに学んだ。私たちは選手も学生も、そのうちの一人だった。東京オリンピックを控え、スポーツに対してどの関心が強まる中で、個人の意見を主張することの重要性に気が付かれ、自分たちの考えを発信したいの思いから、この映画祭を企画した。

スポーツに関する報道の多さは、美化されたものであり、選手たちの本当の姿を映して映したくない。そこには、暗黙の了解が存在している。今まで大人たちが見えない振りをするためのスポーツの問題に、私たちは真摯に向き合う。

本映画祭では、選手たちが自らの存在意義と理想に実現しようとする映画を選んだ。

清水監督の「花形選手」(1937)は、スポーツがモダンな娯楽だった頃の姿を忠実に捉えている。岸本選手スクール時代の影響で公開中止となした西河元監督「スバルタの海」(1983)では、体格を正当化した指導法を借問することができる。トニー・チャンドン監督「長距離ランナーの孤独」(1962)は、走ることと社会に対する若者の反抗心を主張する。森繁雄監督「ひゃくはち」(2008)の選手たちの姿は、何となくも試合に出たい、勝たいたいという思いが描かれている。

また、「チームブルー」は、日本の土壌と結びつくと人を傷つける力がある。個人の意見が尊重されないスポーツの古い制度から脱却しなければならない。オリンピックを目前にして、映画を通して新しいスポーツ像を提示し、観客とアスリートと共に考えていきたい。アスリートも試合でパフォーマンスをする。私たちは、映画でパフォーマンスをする。闘う場所を違えど、同じ表現者だから。

セックス・チェック 第二の性

原研吉 1968年 10月 35min / 99分
監督: フランソワーズ・トリヤール

寺内大吉の短編小説をもとに田代一朗が映画、村松道雄が映画化。戦争中、オリーブの夢を諦めたスズランは、盗路司(影形勝)と知り合う。寺内(安田二郎)の路上の才能に目をつけ、自身コーチを名乗るに成功する。[「ついに女性にだけ」と商業界に近づけば、期待が高まる]。しかし、セックス・チェックで男女両性の生殖器と診断される。スポーツ性の問題を扱った異色のスポーツ映画。

スバルタ教育 くだばれ親父

原研吉 1970年 9月 35min / 100分
監督: フランソワーズ・トリヤール

十数年前にスズランに上った後の続編。家庭崩壊の危機に直面した石原裕次郎演じる田上三郎はプロ野球の審判員。子と母は愛の母子(西尾光子)に任せ、「スバルタ」化した足指は昭和の父親像を演じる。スバルタ教育が育てた西尾の母の組み合わはイキチキ娘などは、シャチコビコ(子)はシゲキ(女)はナツキ(タル)は親父は目をさませ! すべて収録! 格次郎の痛快巨編!

スバルタの海

原研吉 1983年 10月 35min / 100分
監督: フランソワーズ・トリヤール

映画完成後に岸本校長が逮捕され、公開中止となった悲劇的関係。愛知にある岸本選手スクールには、全国から競球学校の手に負えなかった少年少女たちが送られていた。校長がの杜撰シゴキ、監督の仲間の死……。もう一度ともな大人にならざる少年少女、実情をばしめ開き、製作陣の事件が話した一作。

ピンポン

原研吉 2008年 10月 35min / 114分
監督: アスリート・フィルム

松本大洋の人気コミックを映画化した青春卓球映画。卓球の才能に溢れたベコ(窪塚洋介)は、クールで愛しいスガ(ARATA)のヒロエだった。だが、ベコは上海からの留学生であるチャイン(サムリ)に完敗し、イチャインは9人の子供達をコーチ(大塚孝二)にも負ける。一方、スガは実力をつけていく。彼らに再びイチャインの夢がやってくる。「キネマ旬報」ベストテン位、第26回日本アカデミー賞優秀作品賞。

オフサイド・ガールズ

原研吉 2008年 10月 35min / 100分
監督: フランソワーズ・トリヤール

現在クラブで映画制作と国内外移動を繰り返している監督が得意に撮ってきた最後の作品。イアンではイラン人の戒律と女性性スタジアムでサッカー観戦するとは想像がつかない。だが、どしても自分の目サッカーをみたい少年達と親交してスタジアムと向き合う。少女たちの行動は反体制だが、エンタメとして分業される。2009年10月国際映画祭観賞、フランスの権利に交渉し、今回特別に上映許可。

ひゃくはち

原研吉 2008年 10月 35min / 100分
監督: フランソワーズ・トリヤール

早見和真の同名小説の映画化。甲子園常連の門校、富山高校の硬軟両良人(斎藤真樹)とプロ(中村蒼)は、高校野球の夢である甲子園のグラウンドで指導者アキラと二人揃ってベンチ入りしようとして、次に争うようになる。甲子園常連校のベンチを「リアル」にした青春映画。新藤兼人賞観賞賞、第30回ヨコハマ映画祭新人監督賞受賞。

オリマキの人生で最も幸せな日

キネマ旬報 2018年 10月 35min / 100分
監督: フランソワーズ・トリヤール

1962年、世界タイトル戦に臨むフランクのプロボクサー、オリマキ(ヤルコラヒト)。周囲からの期待やプレッシャーの中、大事な時に倒れる予備はライオ(オウ・イェウ)に恵まれて、臨中の期待を背負うようにして、最も幸せな日は7月1日か、それとも12月10日か。第6回東京国際映画祭観賞賞、第10回ヨコハマ映画祭新人監督賞受賞。

疑惑のチャンピオン

原研吉 1968年 10月 35min / 100分
監督: フランソワーズ・トリヤール

深刻な傷から奇跡的に復活し、ワールド・フランス運動の偉業を成し遂げた男、ランス・アームストロング。しかし、疑いの影に交えられたこのドキュビंगにまつわる疑念であった。新聞記者のデヴィッド・ウォルシュ(ス・オウ)はラン(アム・ス)の証言を聞いて、薬物使用の証拠を集めるべく奔走する。「ウォルシュの著書『Seven Deadly Sins: My Pursuit of Lance Armstrong』に基づいた豪華な英語で「ウィーン」の名匠ステューアーズ監督が映画化。

ザ・ビッグホラー

原研吉 2008年 10月 35min / 114分
監督: アスリート・フィルム

全米最大のアメリカンフットボール・スタジアム、通称「ザ・ビッグハウス」を舞台にしたドキュメンタリー。最大収容人数10万人を誇るその内部には、すべてが異色の超巨大スター・リアリティ番組「ザ・ビッグホラー」の目撃者として圧倒される。スポーツが生み出す無慈悲な背骨に、現代社会が争むままの問題の可視化はこのスタジアムの無慈悲で、混濁を象徴する今日のアメリカ情勢の縮図と書られるかもしれない。監督映画で知られる想和日監督の新境地。

破天荒ボクサー

原研吉 2018年 10月 35min / 115分
監督: フランソワーズ・トリヤール

ボクサー、山口眞一は日本ボクシング界と関係のない監督ドキュメンタリー。山口は11歳でボクサーになった。不運な理由でアメリカで暮らしていた。オールドタイムズホテルの一人に交差を始めた山口。しかし彼の前にボクシング界の古い常識が立ちはたす。吉岡寛隆監督は「ボクサー」の新たな問題が浮かび上がる。東京ドキュメンタリー映画祭2018年、準グランプリ受賞。